カンムリウミスズメ保護プロジェクト
2012 年事業報告

2013 年 3 月

日本野鳥の会

ごあいさつ

日本野鳥の会は 1934 年の創立以来、「野鳥の身になって考える」を基本的な立場として、野鳥とその生息地を守り、自然と人間が共存する豊かな環境づくりに取り組んでいます。特に絶滅の恐れのある野鳥に注目し、湿原のシンボルとしてタンチョウを、森林のシンボルとしてシマフクロウを保全してまいりました。2009 年からは、新たにカンムリウミスズメを海の豊かさのシンボルとして、伊豆諸島を中心にその保護事業を展開しています。

2011 年までの 3 年間は生息状況の把握を目的に調査を実施し、伊豆諸島が生息数において国内第 2 位であることが明らかになりました。さらに、八丈島小池根や下田市神子元島など 6 地点で現在も繁殖していることを確認しました。2012 年は伊豆諸島の調査を継続したほか、東北地方太平洋沿岸において非繁殖期の生息状況も調査しました。また、繁殖地周辺の島民を対象に本種保護への理解の普及に力を入れ、コンサートや博物館企画展を開催しました。さらに、生態記録と普及素材として動画の撮影を試み、東日本初となる抱卵中の様子等の撮影にも成功しました。今後は、生息地の保護と個体数を増加させることを目的に、生活史の解明や人工巣の改良、生息地の保護区指定を目指す活動や法整備に向けた取り組み、生息地周辺を中心に全国的な本種の保護の普及に力を入れていきたいと思います。

なお、今年度のカンムリウミスズメ保護プロジェクトについては、鏑木基金と F 氏基金（鏑木様・F 様より寄せられたご寄付をもとに設けられた基金）と当会の会員および一般の皆さまからのご寄付で実施いたしました。また、伊豆諸島および伊豆半島の関係自治体をはじめ、関係機関・関係各位には今年度も多大なご協力をいただきました。本プロジェクトへのご理解とご協力に心から感謝し、深く御礼申し上げます。

当会は今後も継続してカンムリウミスズメの保護に取り組み、海の生物多様性保全に寄与してまいりますので、一層のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2013 年 3 月

公益財団法人　日本野鳥の会

理事長　佐藤　仁志

カンムリウミスズメ保護プロジェクト　2012 年事業報告

目　次

Ⅰはじめに
1. 事業の経緯と目的 2
2. 事業の主たる実施地 3
3. これまでの取り組み 4
4. 事業目標 5
5. 2012 年事業の概要 6

Ⅱ保護事業
1. 洋上の生息数・分布調査
八丈島・大島・伊豆半島・繁殖地間 7
三宅島 13
新島（夜間） 14
2. 定期航路調査 15
3. 繁殖状況調査 16
4. 非繁殖期調査 17
5. 人工巣設置実験（神子元島） 19
6. Web を利用した目撃情報収集 20

Ⅲ普及および広報
1. 生態映像の撮影 21
2. リーフレット発行 23
3. 各島での普及活動
神津島：コンサート「アムール・ドゥ・ラ・メール」 24
三宅島：三宅中学校洋上観察会 25
新島：新島村博物館とのイベント開催 26
5. イベント出展 28
6. マスコミによる広報 28
7. 当会発行媒体による広報 29

謝辞

Ⅰはじめに

1. 事業の経緯と目的

趣　旨

カンムリウミスズメは日本近海のみに分布が限定されている鳥類で､推定個体数が 5,000 羽から 1 万羽と極めて少なく、環境省のレッドリストでは絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。体長約 24 ㎝と、ムクドリほどの大きさで体重は約 160ｇ、黒い冠羽と頬、白い後頭部などが羽色の特徴である。生活のほとんどを洋上で過ごし、陸に上がるのは繁殖期のみで、人の近づけない離島や岩礁の岩のすき間、木の根元、地面のくぼみなどに営巣する。分布域が日本近海に限られているため、我が国が保護に取り組まなければ絶滅する恐れが高く具体的な保護対策の検討が急務である。しかしながら観察機会の少なさや、調査の難しさから、詳しい生息状況や生態が十分に把握されておらず、保護対策もほとんど講じられていない。一般には、存在そのものさえが知られていない。

当会ではかねてより東京都伊豆諸島の三宅島を中心に、本種の保護に取り組んできた。そこで 2009 年の当会創立 75 周年を機に、カンムリウミスズメを対象種として、重点的な保護および保護の普及事業に着手することとなった。

対象種の選択と意義

国際的な観点に立ち、我が国が優先して保護に取り組むべき種として、また、当会が取り組むべき保護対象種として、次の基準により選択した。

・日本のレッドリスト（環境省 2006）と世界のレッドリスト（IUCN2008）に重複してランクされているのが 26 種。
・上記 26 種のうち、日本鳥類目録第 6 版（日本鳥学会 2000）で留鳥（PB）もしくは渡り性の繁殖種（MB）とされているのは 17 種。
・上記 17 種のうち、行政機関や他団体の取り組みが少なく、一方で当会では支部を含めすでに何らかの活動実績がある種。

2. 事業の主たる実施地

本事業の主たる実施地は、東京都の伊豆諸島の島々とその周辺海域、および静岡県の伊豆半島沿岸や隣接する島である。また伊豆諸島の繁殖個体群の非繁殖期の移動先と予想し、東北地方太平洋岸沿岸や道東部でも一部調査を実施している。

伊豆諸島は伊豆半島の東沖に位置する大島（伊豆大島）から孀婦岩（そうふがん）まで南北約 560 km、100 あまりの島々からなる。多くが無人島で、大島・利島・新島・式根島・神津島・三宅島・御蔵島・八丈島・青ヶ島の 9 島が有人島である。伊豆諸島の島々はいずれも火山島もしくは海底火山の外輪が海面から高くなったもので、成立年代は様々である。黒潮の流れが強く、潮や波によって削られた急峻な地形をもつ島が多い。

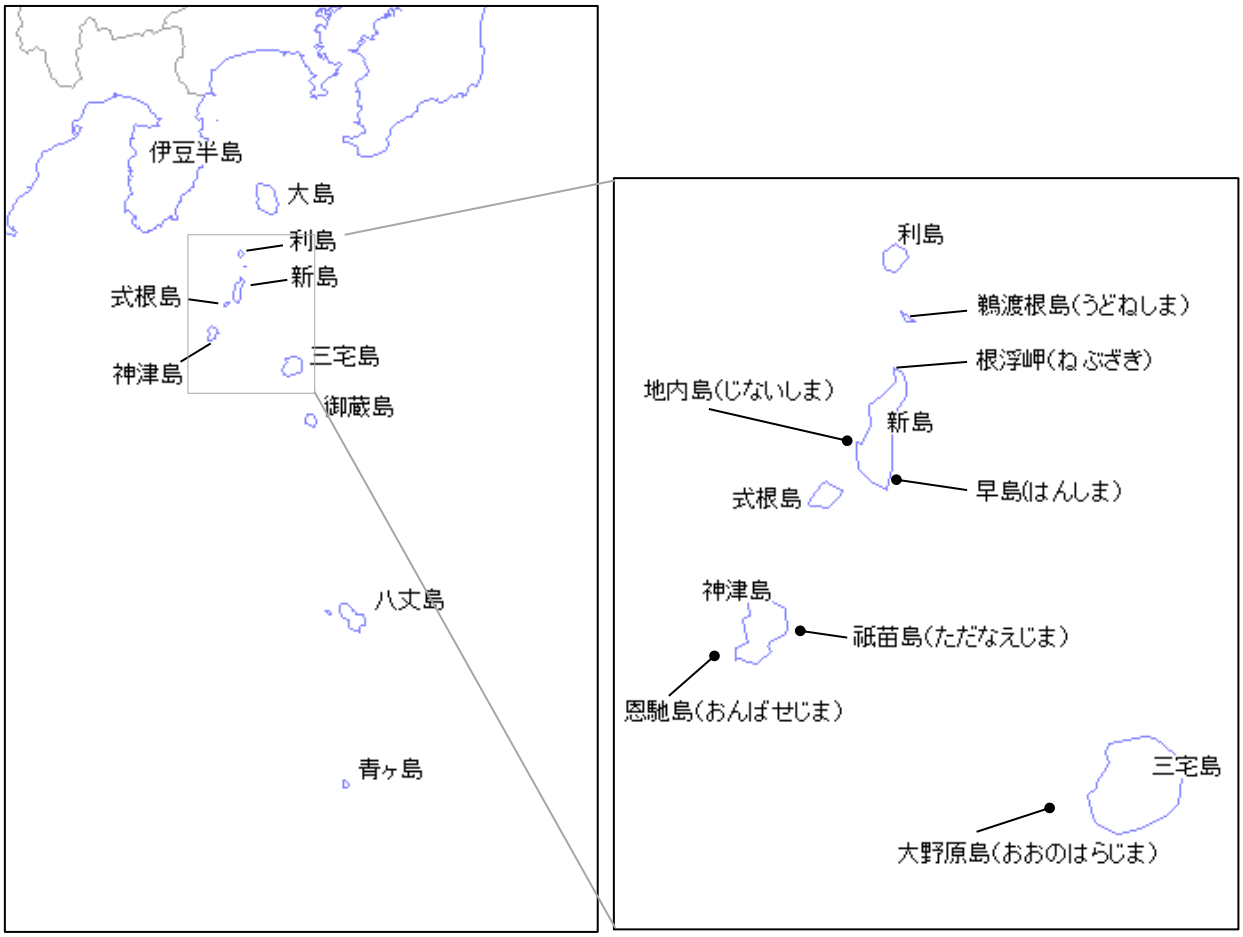

図 1. 事業の対象地域

3. これまでの取り組み

1995 年から 2008 年
三宅島アカコッコ館を拠点としたモニタリング

2008 年以前では、当会が東京都三宅村より運営を受託する「三宅島自然ふれあいセンター・アカコッコ館」を拠点施設に、カンムリウミスズメの洋上分布と個体数調査を継続してきた。遊漁船を用いて 1995 年から 2008 年の期間に計 35 回実施した。2000 年夏の三宅島雄山の噴火の際は三宅島からの出船ができなくなったため、神津島や式根島から船を出し、調査頻度を年数回から 1 回に減らして継続した。1 回の調査あたりの確認数の最大は、2003 年 5 月 6 日式根島―三宅島を往復する調査で 237 羽、三宅島周辺海域では 1995 年 5 月 11 日に 205 羽であった。海況により年によって調査回数がことなることや、観察条件が大きく変わることから、生息数の増減傾向については明らかにできなかったが、少なくとも 100～200 羽が三宅島―大野原島の海域に生息していることが分かった。1994 年と 1995 年には大野原島子安根で上陸調査を行い、本種の営巣を確認している。

2009 年から 2011 年
三宅島から伊豆諸島へ調査海域を拡大

2009 年以降は本種の保護を当会の重点事業とし、調査の規模を拡大した。2011 年までの 3 年間は、伊豆諸島における本種の生息数と繁殖地の現状を把握するための調査を実施した。2010 年と 2011 年繁殖期に実施した、複数の調査船による一斉調査の結果から、約 1000 羽が伊豆諸島に生息していると推定した。この生息数は最大の繁殖地である宮城県枇榔島（推定 3000 羽が生息）に次ぐ規模である。新島・神津島・三宅島を結ぶ海域は特に分布が集中し、本種にとって特に重要な海域である可能性が高いことがわかった。上陸による繁殖状況の調査では、6 か所（神子元島・新島根浮岬・祇苗島・恩馳島・大野原島・小池根）で繁殖を確認した。１つの海域に 6 か所と多数の繁殖地が存在するのは、現在知られている限りではこの海域のみであり、海域全体を適切に保全していくことが求められる。

4. 事業目標

長期目標

日本沿岸の繁殖個体数を 1 万羽以上確保すること目指し、最大の繁殖地である宮崎県枇榔島（推定繁殖個体数 3000 羽）以外に 1000 羽クラス以上の安定的な集団繁殖地を複数個所確保する。

短期目標（2012－14 年）

過去3年間の結果を受け2014年にかけての3年間は、伊豆諸島の繁殖個体群の繁殖条件、非繁殖期の生態の解明を進めるとともに、本種の保護活動への理解を求める普及事業にも重点を置く。

【調査・保護事業】

(1) 繁殖環境の保全

—伊豆諸島の繁殖地において、繁殖状況（巣穴の構造、天敵の有無等）を把握し、繁殖条件を明らかにするとともに、記録映像を撮影、蓄積する。

—前記で得られた結果に基づき、人工巣の設置用件、天敵への対応策など、保護増殖に向けた具体策を立案し、試験実施する。

—前記で得られた保護増殖に向けた対策を、必要に応じて国等へ提案すると共に、保護区となっていない繁殖地や海面について、国指定鳥獣保護区指定等の保護策を国等へ働きかける。

(2) 非繁殖期の生態の解明

各生息地において研究者との情報交換を行うと共に、非繁殖期における目撃情報等を呼びかけ、生態にかかる情報を収集する。

【普及事業】

(1) 繁殖地周辺への普及

生息地にかかる自治体及び地元住民が、本種保護の重要性を理解し、積極的に保護活動へ参画するよう、啓発や参加プログラムの提示等を行う。

(2) 生息海域全般への普及

生息海域に関係する漁協やマリーナなどに対し、本種保護への協力要請を行うと共に、保護活動へ参画するよう啓発や参加プログラムの提示等を行う。

(3) 全国への普及

当会が発行や制作する既存媒体の他、テレビ媒体等を活用し、本種保護の重要性を訴え、本種の認知度を全国的に向上させる。

5. 2012 年事業の概要

【調査・保護事業】

(1) 繁殖環境の保全

2010 年の繁殖期後より神子元島に設置している人工巣の利用状況調査を継続した。今年度も利用の痕跡は確認されなかった。

繁殖地の捕食者対策を検討するうえでの基礎情報を得るため、主要な繁殖地のネズミ類の侵入状況を調査するための情報収集を進めた。

その他未踏査海域での分布調査を行い、実施したすべての海域で本種が観察できた。また一部の繁殖地でモニタリングを行い、今季も繁殖を確認した。

(2)非繁殖期の生態の解明

2009 年下期より継続している Web ページを通した目撃情報の収集を継続し、繁殖期の情報も含めて 12 件の情報を得た。

2011 年より行っている東北地方太平洋岸沖での洋上調査を継続した。調査海域を 5 か所に拡大し、10 航海で 18 羽の観察記録を得た。

【普及事業】

(1) 繁殖地周辺への普及

神津島でカンムリウミスズメと海をテーマとしたコンサートを開催した。三宅島では三宅中学校の生徒を対象に洋上観察会を実施し、本種とその繁殖地の観察を行った。新島では、新島村博物館と連携し企画展やコンサート、セミナーなど一連の普及イベントを開催した。

(2)生息海域全般への普及

2009 年下期より継続している Web ページを通した目撃情報の収集を継続し、全国の生息海域から情報提供を呼びかけた。

(3)全国への普及

テレビ媒体による普及に向け本種の生態や生息地の撮影を行い、東日本初となる生態映像を複数得た。

Ⅱ保護事業

1. 洋上の生息数・分布調査

八丈島・大島・伊豆半島・繁殖地間

背景と目的

2011 年まで実施した生息数・洋上分布調査の補足として八丈島・大島・伊豆半島の周辺海域、繁殖地間の海域の調査を行った。

調査海域と方法

遊漁船で航行し、目視で確認した個体をカウントし GPS で位置情報を記録した。ダブルカウントを避ける航路をとり、時速 18Km（約 10 ノット）で航行した。調査員は 2～4 人で実施した。

八 丈 島：2010 年 4 月下旬に 4 羽、2011 年 5 月中旬に 0 羽を記録しているため、今年度は時期を早め、3 月に 3 回、4 月下旬に 1 回の計 3 回実施した。3 月の 3 回の調査のうち 2 回は 2 隻の船による同時調査であった。調査員は 3～4 人で行った。

大　　島：周辺に繁殖地は確認されていないが、定期航路（三宅島―東京）の大島沖から房総半島沖にかけての海域で観察されているため、島の周辺を重点的に調査した。3 月 16 日に静岡県下田港から神子元島を経由し大島南東沖を往復するコースで 1 回実施した。調査員は 2 人で実施した。

伊豆半島：半島東部海域を 2011 年 2 月下旬、4 月中旬に、南部海域を 2011 年 1 月下旬、2 月上旬、3 月上旬に調査を行っている。本調査では昨年と重複の少ないコースをとり実施した。下田港を出発し下田市盥岬（たらいみさき）から伊東市城ケ崎海岸までの伊豆半島沿いを航行した。調査員は 2 人で行った。

繁殖地間：2011 年に下田市神子元島―神津島恩馳島、三宅島大野原島―新島早島―新島鵜渡根島、神津島―藺灘波島―銭洲の各海域で実施され、繁殖地または繁殖の可能性のある島の周辺ほど多く観察される傾向があった。本調査では未調査の下田市神子元島―新島の各繁殖地、神津島恩馳島―三宅島大野原島の各海域を調査した。下田―新島では、下田港を出港し、新島北側から根浮岬・鵜渡根島・早島・地内島付近を通過しながら一周し、下田港へ帰港した。調査員は 2 人で行った。神津島―三宅島では、神津島港から神津島の南側を通り、大野原島付近を経て三宅島阿古港へ入港した。調査員は 2 人で行った。

結　果

八 丈 島：1 回の調査あたり 2 羽から 8 羽が記録され、単独か数羽で行動していた。幼鳥は確認されなかった。

大　　島：下田－神子元島―大島で計 17 羽を確認し、そのうち 7 羽を大島の南東沖で確認した。幼鳥は確認されなかった。伊豆半島または大島寄りの海域で観察され、半島と島を結ぶ海域の中間付近では姿が見られなかった。

伊豆半島：盥岬から東伊豆町穴切湾付近までの海域で計 11 羽観察された。

繁殖地間：下田―新島では新島北部沖と下田港から約 8.5Km 沖の海域で本種を観察した。それぞれ 9 羽と 1 羽であった。神津島―三宅島では、神津島から約 8 kmの海域から大野原島付近の海域にかけて計 21 羽が観察された。

表 1. 八丈島

調査日	時間	個体数（羽）			備考
		成鳥	幼鳥	合計	
3 月 20 日	10:00～15:25	8	0	8	2 羽または 3 羽の群で観察された。
3 月 22 日	9:10～12:55	4	0	4	全て単独で観察された。
3 月 22 日	9:05～13:58	4	0	4	2 羽または単独で観察された。
4 月 25 日	9:36～14:02	2	0	2	2 羽で観察された。

表 2. 大島

調査日	時間	個体数（羽）			備考
		成鳥	幼鳥	合計	
3 月 16 日	8:02～13:57 ※下田の発着時間	7	0	7	1～3 羽で観察された。

表 3. 伊豆半島

調査日	時間	個体数（羽）			備考
		成鳥	幼鳥	合計	
3 月 30 日	7:53～13:32	11	0	11	単独か 2 羽で観察された。

表 4. 繁殖地間（下田―新島）

調査日	時間	個体数（羽）			備考
		成鳥	幼鳥	合計	
3 月 29 日	7:53～13:32	10	0	10	新島北部沖で特に見られた。単独か 2 羽、4 羽で観察された。

表 5. 繁殖地間（神津島―三宅島）

調査日	時間	個体数（羽）			備考
		成鳥	幼鳥	合計	
5 月 11 日	8:33～10:50	21	0	21	単独か 2 羽、4 羽で観察された。

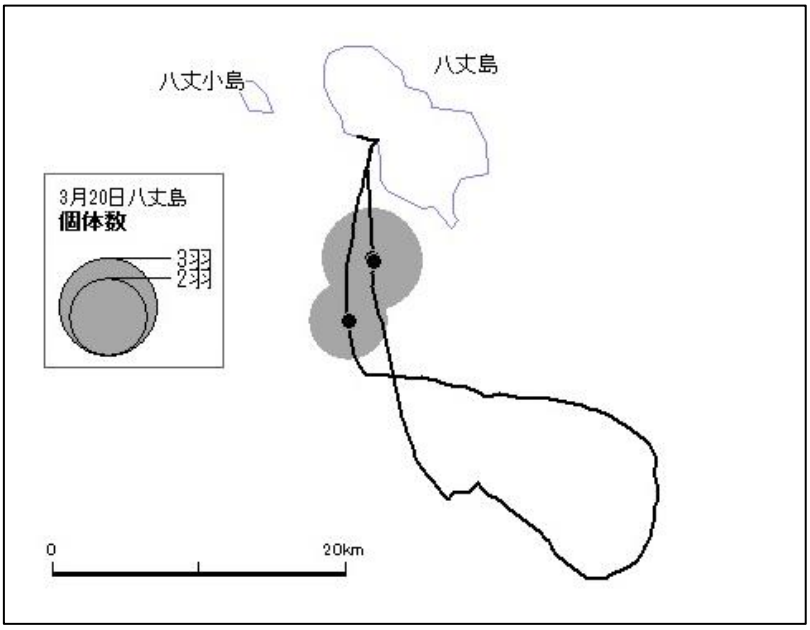

図 2. 八丈島 3 月 20 日調査コース

※3 羽ずつ確認している 2 地点の間隔が 200m 程度のためグラフの円が重なっている。

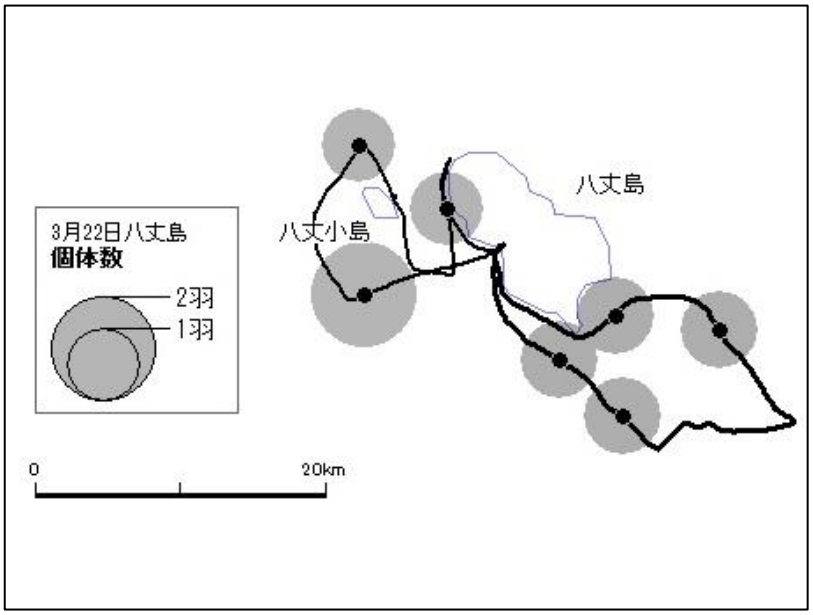

図 3. 八丈島 3 月 22 日調査コース

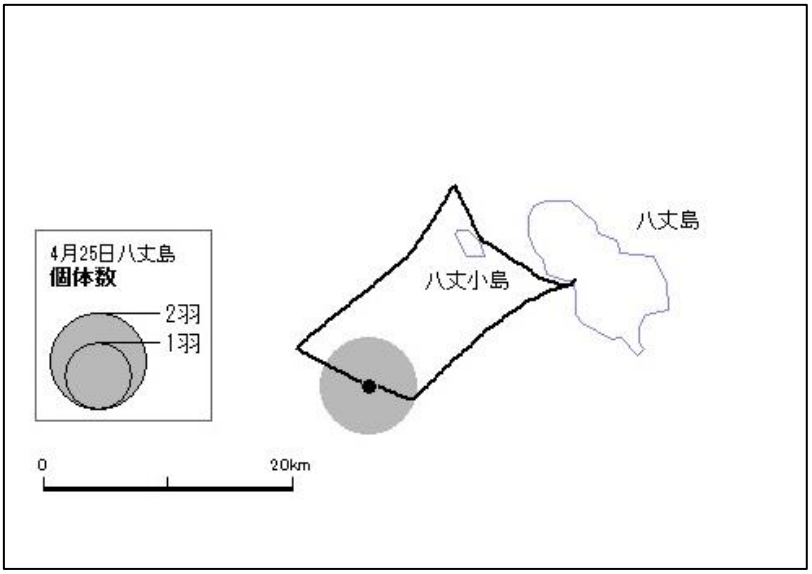

図 4. 八丈島 4 月 25 日調査コース

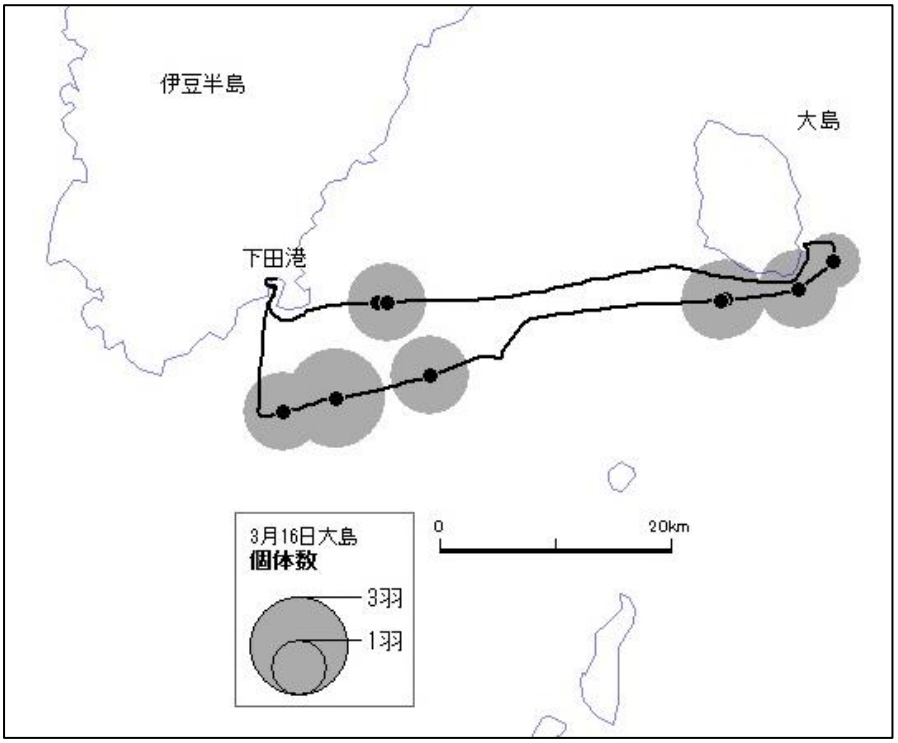

図 5. 大島 3 月 16 日調査コース

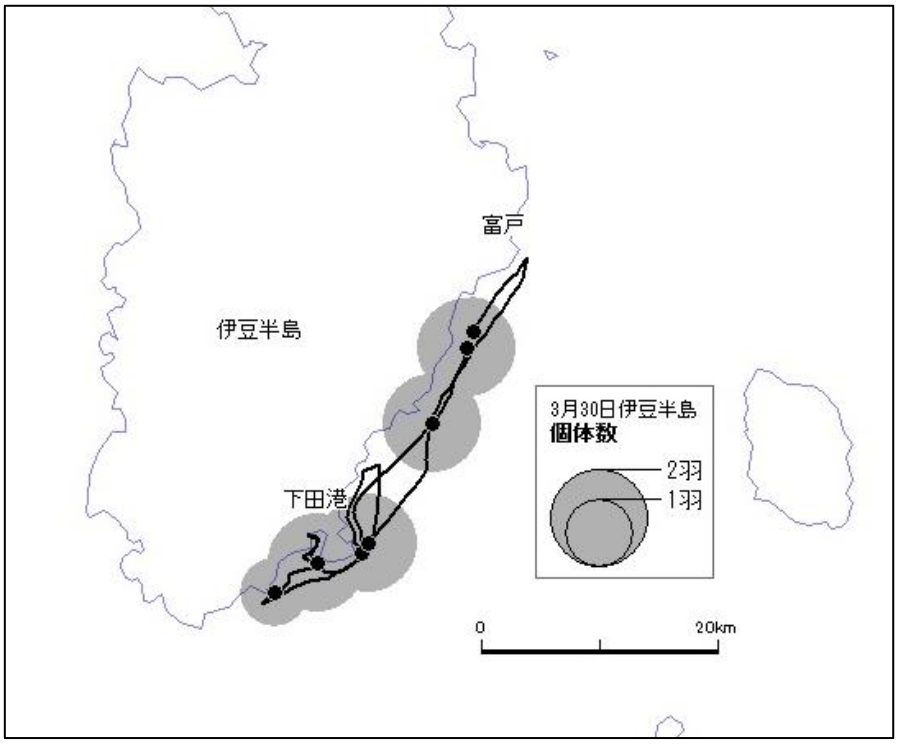

図 6. 伊豆半島 3 月 30 日調査コース

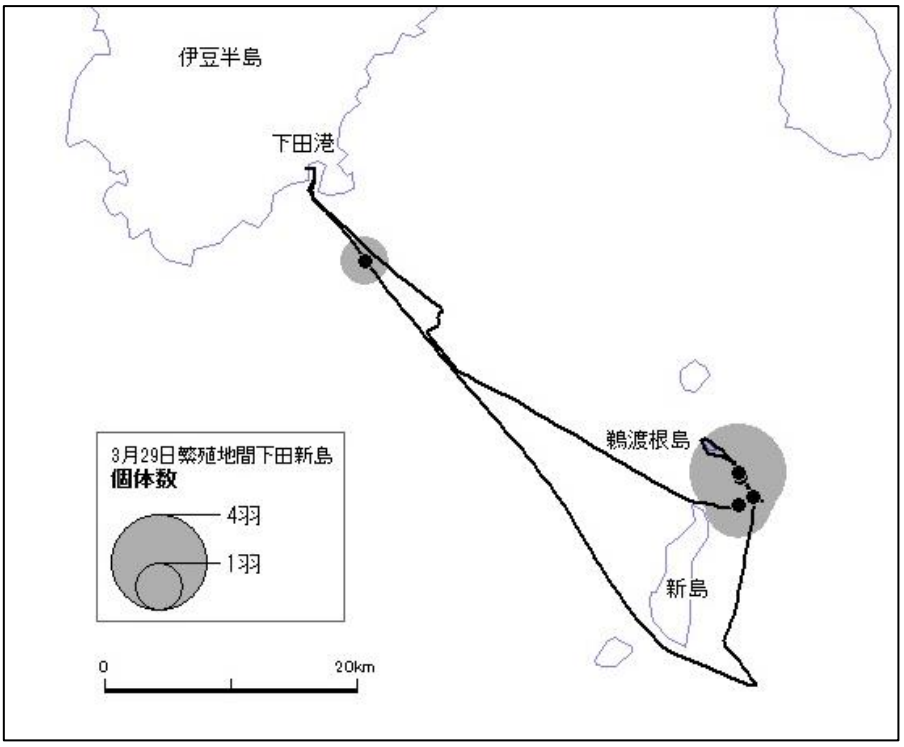

図 7. 繁殖地間（下田—新島）3 月 29 日調査コース

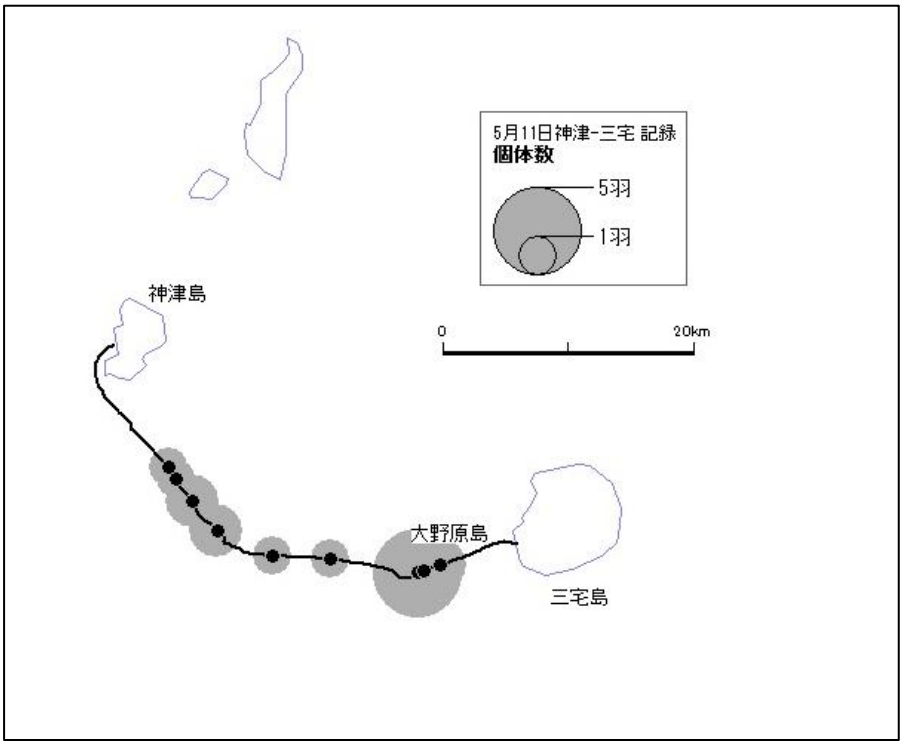

図 8. 繁殖地間（神津島—三宅島）5 月 11 日調査コース

図 9. 八丈島 4 月 25 日調査の様子

三宅島

背景と目的

カンムリウミスズメの繁殖地への移動時期を把握するために実施した。三宅島周辺での２月の調査はこれまで 2010 年２月 14 日と 2012 年２月２の２回行われ、観察されたのは 2012 年の調査の２羽のみである。

調査海域と方法

２月 13 日に阿古漁港を出航し、大野原島周辺から三宅島南側にかけての海域を調査した。遊漁船で航行し、目視で確認した個体をカウントし GPS で位置情報を記録した。ダブルカウントを避ける航路をとり、時速 18Km（約 10 ノット）で航行した。調査員は３人で実施した。

結果と考察

約３時間の航行で成鳥 15 羽を確認した。2～4 羽の群れで確認された。２月中旬には繁殖地付近に到着している個体がいることが確認された。

表 6. 三宅島

調査日	時間	個体数（羽）			備考
		成鳥	幼鳥	合計	
2 月 13 日	8:40～11:50	15	0	15	2～4 羽の群で観察された。

図 10. 観察された成鳥

図 11. 調査の様子

新島（夜間）

背景と目的

新島の漁師から夜間の漁の際にカンムリウミスズメを目撃することがあると情報を得たことから、夜間の生態と生息状況を調べるために行った。

調査海域と方法

アカイカ釣りの漁船に調査員 2 名が同乗し、新島の地内島西沖の海域を調査した。目視によって確認できた個体数を記録した。

結果と考察

鳴きながら洋上で活動する群れを、幼鳥を含め 69 羽確認した。鳴き声のみで場所が特定できなかったものを含めると 100 羽近い数がいたことが推定される。地内島は 2011 年の繁殖状況調査で、営巣やその痕跡が確認されていないが、3 羽の幼鳥が確認されたことから繁殖している可能性がある。

表 7. 新島（夜間）

調査日時	個体数（羽）			備考
	成鳥	幼鳥	合計	
5 月 6 日 8:58 ～7 日 17:02	66	3	69	数字は位置が記録できたもののみ。 100 羽近くいたと予想できる。

図 12. 新島 5 月 6 日調査コース

図 13. 夜間行動する幼鳥

2. 定期航路調査

調査概要

各島への渡航時、本種の分布の季節変化に関する情報を蓄積するため、船上から本種の観察を行った。伊豆諸島と本土を結ぶ定期航路の船上から 4 航路 7 回行った。デッキから目視または 8～10 倍程度の双眼鏡を用いて観察し、発見した個体数と時刻を記録した。また観察地点を GPS で記録した。大型船であるため鳥までの距離がつかみにくいことから、船からの観察幅は設定していない。調査者は 1～3 人で行った。

1 月 27 日に三宅島―東京航路で成長 2 羽を確認した。この時期の調査記録はほとんどなく、伊豆諸島における過去の初認記録（2012 年 2 月 14 日　三宅島周辺で 2 羽）のうち最も早い記録となった。5 月 25 日は 3 羽の幼鳥が観察された。3 羽のうち 2 羽は千葉県房総半島の洲崎沖で見つかった。

表 8. 定期航路調査

日時	航路	個体数（羽）			備考
		成鳥	幼鳥	合計	
1 月 24 日 9:47～13:40	八丈島―三宅島	0	0	0	
1 月 27 日 14:30～17:00	三宅島―東京	2	0	0	伊豆諸島の過去の初認記録（2010 年 2 月 14 日 2 羽）より早い記録。種不明のウミスズメ類 2 羽も確認。
2 月 21 日 14:16～17:07	三宅島―東京	0	0	0	
2 月 5 日 14:16～17:07	神津島―横浜	0	0	0	
5 月 1 日 14:05～16:10	神津島―下田	5	0	5	
5 月 14 日 4:20～9:20	三宅島―東京	2	0	2	
5 月 25 日 14:20～18:02	三宅島―東京	46	3	49	観察した親子はそれぞれ、成鳥 2＋幼鳥 2、成鳥 2＋幼鳥 1。

3. 繁殖状況調査

背景と目的

過去3年間で、神子元島・伊豆半島城ケ崎・鵜渡根島・新島根浮岬・新島テラニワ・地内島・大野原島・祇苗島・恩馳島・八丈島小池根の 10 か所で繁殖状況調査を行い、そのうち神子元島・新島根浮岬・祇苗島・恩馳島・大野原島・八丈島小池根の 6 か所で繁殖が確認された。主要な繁殖地での繁殖状況のモニタリングを行うとともに、未踏査の新島あじあ磯の調査を行った。

調査地と方法

遊漁船で神子元島・新島あじあ磯・根浮岬・祇苗島に上陸し、岩と岩の間や割れ目、草の根元などを目視で調査した。各島での滞在時間と調査時間は一定でない。調査員は1～3名で実施した。

結果と考察

神子元島・新島根浮岬・祇苗島で、繁殖または繁殖の痕跡を確認することができた。新島あじあ磯では、大きさと周辺環境からカンムリウミスズメの体羽と思われる黒い羽毛が見つかり、本種が同地点に上陸している可能性がある。

表 9. 繁殖状況調査

調査地	調査日	営巣数		痕跡		備考
		抱卵	放棄	卵殻	死体	
神子元島	3 月 15 日	0	0	0	0	
神子元島	4 月 18－19 日	0	0	1	0	20 時から翌 4 時にかけて盛んに鳴き声が聞かれた
新島あじあ磯	5 月 7 日	0	0	0	0	カンムリウミスズメと思われる羽毛が見つかった。
新島根浮岬	5 月 8 日	4	0	20-30	0	
祇苗島	5 月 8－9 日	2	0	0	0	周囲から多数の鳴き声を確認している。

4. 非繁殖期調査

背景と目的

伊豆諸島のカンムリウミスズメは、繁殖の終わった 6 月以降、繁殖地の周辺海域から確認されなくなる。他の海域へ移動していると考えられるが、どこで非繁殖期を過ごしているかは明らかになっていない。2009 年より当会が実施している目撃情報収集では、茨城県大洗港―北海道苫小牧港を結ぶ航路上や北海道東部沿岸で夏から秋の目撃情報が寄せられ、可能性の一つとして繁殖が終わると東北地方太平洋沿岸を北上していることが考えられる。本種の季節移動を明らかにするために東北地方沿岸海域を中心に調査を行った。2010 年より開始し、同年は定期航路上より、2011 年は遊漁船を利用し岩手県から宮城県にかけての沿岸海域 3 か所を 3 期に分け調査している。

調査海域と方法

青森県から福島県にかけて約 80～150Km の間隔で港を選定し、青森県八戸市八戸港、岩手県普代村太田名部港、大船渡市大船渡港、宮城県塩竈市塩釜港、福島県小名浜市小名浜港の 5 港を利用した。繁殖期終了後まもなくの時期に重点を置き 6－7 月に計 10 回の調査を実施した。遊漁船を使用し、各回とも午前 7 時から午後 2 時までの間に 5～7 時間行なった。方法も各港共通で、ダブルカウントを避けるコースで航行し、目視した個体をカウント、GPS で位置を記録した。

結果と考察

6 月の宮城県塩釜港からの調査で 2 羽、7 月の青森県八戸港・岩手県太田名部港・大船渡港からの 3 海域では計 16 羽を記録した。大船渡沖の観察個体 9 羽のうち 6 羽は沿岸数 km 付近で発見され、これまでの目撃情報（沖合約 20km の定期航路上）と比べると、より陸地に近い海域も利用していることがわかった。

図 14. 6 月 13 日に観察した 2 羽（塩釜沖）

表 10. 小名浜

調査日	時間	個体数（羽）			備考
		成鳥	幼鳥	合計	
6 月 14 日	7:10～13:35	0	0	0	
6 月 29 日	6:46～13:45	0	0	0	

表 11. 塩釜

調査日	時間	個体数（羽）			備考
		成鳥	幼鳥	合計	
6 月 13 日	7:15～13:55	2	0	2	1 羽は非繁殖羽。もう 1 羽は換羽中。2 羽で行動していた。
6 月 28 日	7:10～13:34	0	0	0	

表 12. 大船渡

調査日	時間	個体数（羽）			備考
		成鳥	幼鳥	合計	
6 月 12 日	7:23～14:27	0	0	0	
6 月 27 日	7:09～14:02	0	0	0	
7 月 26 日	7:11～13:59	9	0	9	単独または 2 羽、4 羽で確認された。

表 13. 太田名部

調査日	時間	個体数（羽）			備考
		成鳥	幼鳥	合計	
6 月 26 日	6:50～14:00	0	0	0	
7 月 25 日	7:00～13:54	4	0	4	全て単独で観察された。

表 14. 八戸

調査日	時間	個体数（羽）			備考
		成鳥	幼鳥	合計	
7 月 24 日	7:07～14:29	3	0	3	単独または 2 羽で観察された。

5. 人工巣設置実験（神子元島）

実験概要

カンムリウミスズメは過去には伊豆諸島のほとんどの島で繁殖していたとされているが、1980 年代以降も繁殖が確認されているのは 8 か所に過ぎない。繁殖地の減少をくい止めるとともに、繁殖数の増加を図るため、本種の増殖に向けた知見を得る試みとして 2010 年より人工巣設置実験を実施している。本種の人工巣設置はこれまでほとんど例がなく、成功した事例もない。また伊豆諸島とその周辺においては初めての取り組みとなる。実施地は、現在も繁殖しているものの営巣適地が少なく、営巣数も減少していると考えられる場所であること、捕食者のネズミ類が確認されてないこと、他の繁殖地に比べ上陸や資材運搬が容易であることから静岡県下田市沖の神子元島を選定している。

2012 年度の取り組みと結果

人工巣の利用状況調査を 3 月 15 日昼間と 4 月 18－19 日夜間で実施した。ともに人工巣の利用または利用の痕跡は見られなかった。自然巣での繁殖は 4 月の調査で確認された（3.繁殖状況調査の項目を参照）。11 月 22 日には来季繁殖期に向け人工巣の点検とメンテナンスを行った。

図 15. 設置状況 11 月 22 日

図 16. 点検の様子 11 月 22 日

6. Web を利用した目撃情報収集

実施概要

カンムリウミスズメは北海道から九州まで日本の沿岸海域に生息しているが、その観察機会の少なさや調査の経済的な負担から解明されていないことが多く、季節的な移動や繁殖地の分布については未だ不明が多い。定期航路上や海獣類の観察ツアー、漁船から目撃されることがあることから、会員やバードウォッチャー、漁業関係者、船員へ呼びかけを行い、全国から本種の観察情報を募った。2009 年より当会ホームページに募集窓口を開設し、随時情報を収集・公開している。2012 年末までに 2007-2012 年の情報が 61 件寄せられた（表 15）。うち、繁殖期（2-5 月）の情報は 30 件、非繁殖期（6-9 月）は 25 件、非繁殖期（10-翌 1 月）は 6 件であった。

繁殖期の観察地点は、北は新潟県から南は長崎県までの範囲で寄せられた。非繁殖期は 6-9 月で東北地方～北海道のほか関東地方沿岸や対馬付近、10-翌 3 月で瀬戸内海周辺から寄せられた。日本海沿岸地域や非繁殖期（10-翌 1 月）の情報が特に不足している。

表 15. これまでの目撃情報投稿件数

	情報件数	個体数	海域
繁殖期（2-5 月）	30	281	千葉県銚子市、新潟県佐渡航路上、神奈川県中郡、静岡県熱海市、静岡県伊東市、東京都新島村など
非繁殖期（6-9 月）	25	155	東北地方太平洋沿岸、北海道東部、北海道礼文島、神奈川県三浦市城ケ島、千葉県安房郡、静岡県伊東市、長崎県対馬市
非繁殖期（10-翌 1 月）	6	39	香川県坂出市沙弥島、愛媛県今治市（水路内）、大分県大分市、福岡県福津市
合計	61	475	24 都道県の沿岸海域から情報が寄せられた。

※情報件数…0 羽の情報も含む（観察適期に見られなかった記録）

※個体数…概算の記録も含めている

2012 年の取り組み

Web での情報収集と公開を継続した。2012 年の記録として寄せられた情報は 12 件であった。観察者が本種の非繁殖期個体を識別する際の参考となるように、東北地方沿岸海域の調査時の記録写真を Web 上に公開した。

Ⅲ普及および広報

1. 生態映像の撮影

目的と対象

繁殖地の住民でさえ観察機会の少ないカンムリウミスズメの生態やその保護活動の様子を、一般に対し効果的に伝えるために動画素材を取得した。本種の映像は限られ、伊豆諸島の個体や生息地を対象とした撮影は初めての試みである。

撮影場所と方法

撮影は日本水中映像株式会社に委託し、撮影スタッフ 2～3 人が調査に同行し行った。カンムリウミスズメのほか、生息地やその海域で見られる生物、調査風景等を撮影した。

結　果

幼鳥を守るように餌探しをする親鳥の行動や、巣立ち直後の幼鳥が夜泳いで沖に出る行動、夜間の抱卵の様子など、撮影が困難であり、東日本初となる映像記録を得ることができた。また成鳥が海面を泳ぐ際の水中での足の動きなどをとらえた映像は日本初の記録と思われる。得られた映像を用いてテレビニュースが放送された。また、新島で開催した「伊豆諸島・新島の野鳥セミナー」の教材として使用した。

表 16. 撮影日程一覧

撮影　日時	場所	主な撮影内容
3 月　27 日	下田港―新島	生息海域や調査の様子撮影。
3 月　29 日	下田港―新島	本種の他、オオミズナギドリの大群やカマイルカを撮影
3 月　30 日	伊豆半島東沿岸	生息海域や調査の様子撮影。本種も撮影。
4 月　29 日	神津島（祇苗島・恩馳島）	カツオの群の周辺に集まる群れを撮影。 海中からの撮影も試みる。
4 月　30 日	神津島（祇苗島・恩馳島）	単独や小群を撮影。
5 月　6－7 日	新島（地内島）	イカ釣り漁船に同行し漁や夜間調査の様子を撮影。夜間、洋上を泳ぐ群れや親子の姿を撮影。
5 月　7 日	新島（あじあ磯）	生息地の調査の様子を撮影。
5 月　8 日	新島（根浮岬）	繁殖地の調査の様子や繁殖の痕跡の撮影。
5 月　8－9 日	神津島（祇苗島）	繁殖地や調査の様子を撮影。抱卵中の個体を撮影。
5 月　10 日	神津島（恩馳島）	潮目に集まるサバとともに 100 羽程の群れや洋上を泳ぐ姿を水中から撮影。

5 月　11 日	神津島（恩馳島）	早朝の洋上で親子を撮影。鳴き交わしの様子、幼鳥への給餌の様子を撮影した。
5 月　11 日	神津島―三宅島	生息海域や調査の様子を撮影。単独または 2～4 羽の群れを撮影。
5 月　12 日	三宅島	カンムリウミスズメの観察ツアーに同乗し、観察会の様子を撮影。
5 月　13 日	三宅島	三宅中学校の洋上観察会に同行し、観察会の様子を撮影。
5 月　20 日	三宅島	繁殖海域や調査の様子、本種の群を撮影。
6 月　11－14 日	東北地方沿岸 （大船渡・塩竈・小名浜）	非繁殖期の生息海域の様子や換羽中の本種を撮影。

図 17.　船上からの撮影の様子

図 18.　海中からの撮影の様子

図 19.　映像の静止画像 1

図 20.　映像の静止画像 2

2. リーフレット発行

目的と対象

2009 年から 2011 年の当会の調査で得られた知見を、一般向けにわかりやすく紹介するために作成した。イラストと端的な解説で構成したもので、調査やイベントの際など本種に関する活動と接点のあった方々へ配布を予定した。

規　格

148.5 ㎜×420 ㎜　／ ジャバラ折り ／ カラー8 ページ　1000 部

結　果

2012 年 4 月から 2013 年 1 月の期間に、約 550 部を配布した。主に調査の協力者や新島村でのカンムリウミスズメコンサートやセミナー、当会主催のシンポジウム「野鳥と洋上風力」などの参加者に配布した。

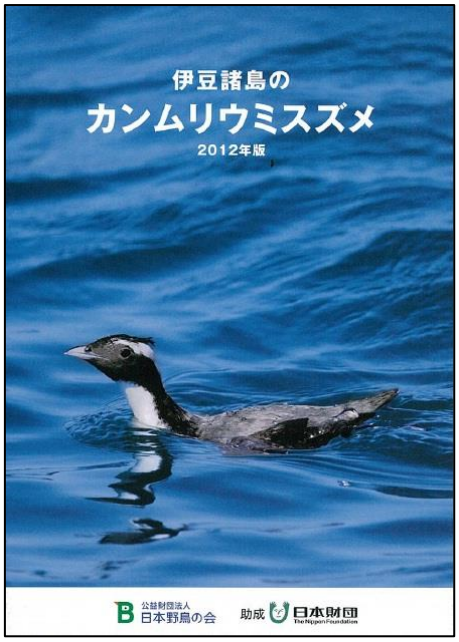

図 21. リーフレット表紙と内容

3. 各島での普及活動

神津島：コンサート「アムール・ドゥ・ラ・メール」

目的と対象

カンムリウミスズメの重要な繁殖地・生息海域である神津島の島民を対象に、本種と海洋環境への関心を高め、保護活動への理解を得るための音楽物語を開催した。

実施概要

日時：：2012 年 2 月 4 日　13：30 開場、14：00 開始（60 分）
　　申し込み不要／無料
場所：東京都神津島／神津島村生きがい健康センター　地域交流ホール
演奏者：オカリナ奏者：善久（Zenkyu）氏、ギター奏者：竹内永和氏
語り：当会職員

結　果

小学生から年配者まで幅広い年齢層で 72 名（神津島村の人口の 3.6%）の来場があった。終了後、参加者からは「ギャバ（本種の神津島での呼び名）が貴重な鳥だと初めて知った」「本物を見てみたい」「エコツアーをやってみたい」など感想や意見を聞くことができた。

図 22. コンサートの様子 1

図 23. コンサートの様子 2

三宅島：三宅中学校洋上観察会

目的と対象

2010 年に三宅中学校の 1 年生を対象に実施した郷土学習「カンムリウミスズメの保護」の発展として、同じ生徒を対象に洋上観察会を行い、本種の保護への関心や理解を深めた。

実施概要

日時：2012 年 5 月 13 日　13：00～15：30

参加者：三宅中学校 3 年生 8 名、三宅中学教員 1 名、三宅村職員 1 名
アカコッコ館レンジャー2 名　※その他、撮影班 4 名が同行

内容：当会レンジャーによるレクチャー後、阿古港から出発し、大野原島までの海域で本種やその繁殖地の観察を行った。遊漁船 2 隻に分乗して実施した。

結　果

出現したカンムリウミスズメは多くはなかったが、間近で泳いだり、飛んだりする姿を観察することができた。2010 年の調べ学習の体験から生徒の観察意欲が高く、船の舳先で積極的に本種を探す姿が見られた。生徒たちからは「一年生の時から学習し、今回実際に見られたので学習してよかったと思った」、「想像以上に小さく、かわいかった。その魅力や歴史を感じた」、「この鳥のことを少しでも多くの人に知ってほしいと思った」などといった感想が聞かれた。

図 24. 観察会の様子 1

図 25. 観察会の様子 2

新島：新島村博物館とのイベント開催

目的と対象

カンムリウミスズメの重要な繁殖地・生息海域である新島の島民を対象に、本種と海洋環境への関心を高め、保護活動への理解を得るためのイベントを開催した。企画展やコンサート、セミナーなど本種への理解度や参加形態別に、一連の企画を実施した。

実施概要と結果

新島村博物館企画展

当会による 3 年間の調査の成果と、カンムリウミスズメと新島のつながりを主な内容に、パネル展示を行った。子ども向けに触って学ぶことのできるタイプの展示物も設置した。開催期間中約 2,300 名が来館し、授業や夏休みの自由研究の素材としても活用された。

企画展名：「新島はカンムリウミスズメのホットスポット！？
～絶滅危惧種の海鳥から見る新島」
期間：2012 年 7 月 19 日～2013 年 2 月 20 日
場所：東京都新島／新島村博物館 2 階企画展コーナー
主催：新島村博物館
企画：日本野鳥の会

コンサート

演奏と映像による音楽物語「アムール・ドゥ・ラ・メール」を開催した。年配者層や女性のグループ、幼児～小学生の家族連れ、小学生のグループなど約 85 名（新島村の人口の 2.8%）が新島及び隣接する式根島から来場した。「本種への興味関心が高まった」「来年以降、教育や観光に活かす道がないか考えてみたい」といった反響があった。

日時：2012 年 9 月 9 日　13：30 開場、14：00 開始（60 分）
申し込み不要／無料
場所：東京都新島／コンサート会場：新島村住民センター
演奏者：オカリナ奏者：善久（Zenkyu）氏、ギター奏者：竹内永和氏
語り：当会職員

伊豆諸島・新島の野鳥セミナー

新島の野鳥をテーマに全 3 回の一般向けセミナーを実施した。第 1 回と第 3 回で、本種を扱った。第 1 回、2 回は各 16 名、第 3 回は 25 名が参加した。参加者は自然愛好会や教員や博物館スタッフなど教育関係者、漁業関係者、行政職員、小学生であった。

講座名：第 1 回「伊豆諸島の野鳥たち～種類、分布、生態の特性について～」
第 2 回「伊豆諸島のアカコッコの現状とその保護活動」
第 3 回「ここまでわかった！希少な海鳥『ちんちく』の暮らしぶり」
講師：第 1 回、第 3 回
江崎逸郎（三宅島自然ふれあいセンター・アカコッコ館レンジャー）
第 2 回
山本裕（日本野鳥の会　自然保護室）
日時：2012 年 10 月 6 日 19：00～21：00（第 1 回、2 回）
2013 年 1 月 19 日 20：00～21：00（第 3 回）
申し込み不要／無料
場所：東京都新島／新島村住民センター

図 26. 企画展の会場

図 27. 企画展展示物の一例

図 28. コンサートの様子

図 29. セミナーの様子

5. イベント出展

実施概要

「鳥の工房つばさ」の開催するバードカービング展（2012 年 5 月 15－20 日、新宿御苑）の会場にカンムリウミスズメとその保護活動を紹介するパネルを展示した。東京バード＆スカイフェスティバル（2012 年 4 月 21－22 日、東京港野鳥公園）にブース出展をし、来場者にポスターや資料を使って取り組みを紹介した。

6. マスコミによる広報等

表 17. 報道一覧

広報媒体	放送日等	内容
NHK BS ニュース（全国）	9 月 13 日	伊豆諸島で撮影された本種の映像をもとに新たに発見された繁殖地や伊豆諸島が国内第 2 位の繁殖地であることが報道された。
NHK ニュース（首都圏）	9 月 13 日	
七島新聞	2 月 28 日	2 月 4 日に開催した神津島でのコンサートの様子が取り上げられた。
南海タイムス	3 月 30 日	3 月に実施した八丈島周辺海域での調査の結果や当会の保護の取り組みについて掲載された。
七島新聞	6 月 8 日	5 月 13 日に行われた三宅中学校の洋上観察会についての記事が掲載された。
七島新聞	9 月 28 日	新島村で開催した企画展やコンサートなど普及活動について取り上げられた。
七島新聞	2013 年 2 月 18 日	1 月 19 日に開講した新島でのセミナーやその内容について取り上げられた。
市民文芸（下田市教育委員会編集発行）	11 月 1 日発行	下田市に生息する天然記念物として表紙に写真が掲載され、キャプションに神子元島での取り組みが紹介された。
教育ジャーナル 9 月号（学研）	9 月 1 日発行	「知っておきたい日本の野鳥」に生態や保護の歴史に関する記事を執筆。

7.　当会発行媒体による広報

当会の会員向けに発行する「野鳥」（3 万部／年 10 回発行）内に設けた、カンムリウミスズメの保護に関する連載「黒潮便り」を継続し、8 回（1 月、2・3 月、4 月、5 月、8 月、9・10 月、11 月、12 月号）掲載した。

またホームページには、東北地方での非繁殖期調査の報告ページと、非繁殖期の画像が増ページを新設した。ブログでは約 120 回更新し、調査や普及活動の情報を随時伝えていった。

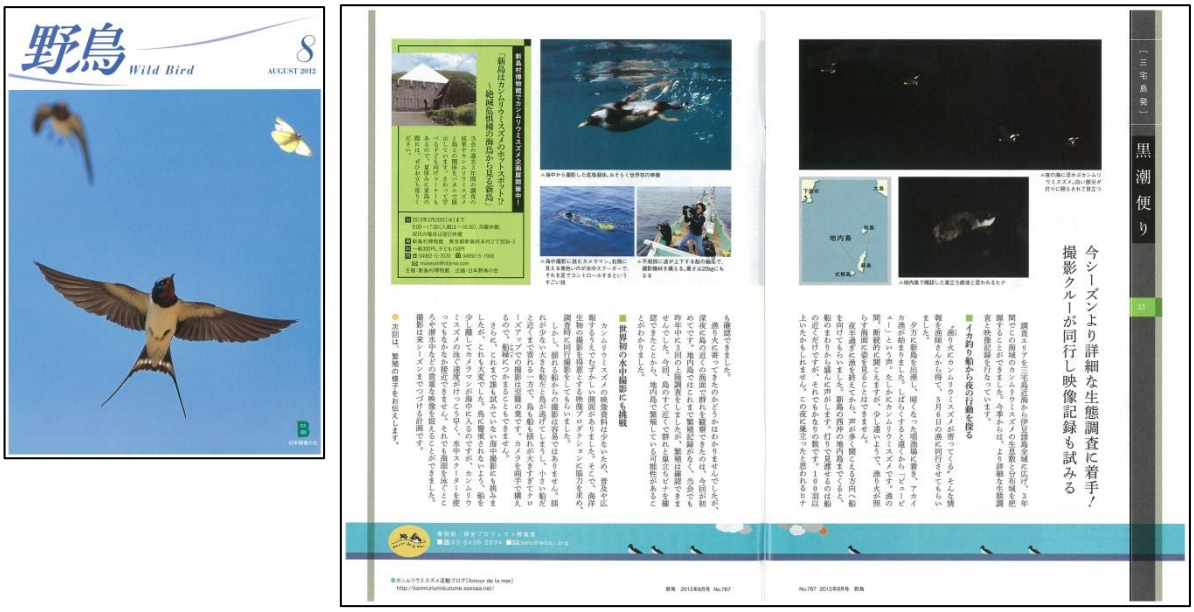

図 30. 野鳥誌 8 月号 表紙と黒潮便り

謝　辞

カンムリウミスズメ保護プロジェクトは鏑木基金とＦ氏基金（鏑木様・Ｆ様より寄せられたご寄付をもとに設けられた基金）と当会の会員および一般の皆さまからのご寄付で実施いたしました。2011 年度内の事業については競艇の交付金による日本財団の助成、およびFA ネットワークによる「学生バードソン 2011」の寄付を受けて実施しています。調査の実施や普及イベントの開催にあたって、多くの船のオーナーをはじめ関係機関・団体の皆さまにお世話になりました。

東京都三宅島　北洋丸　第三松丸　第三英丸
三宅村役場　三宅村観光産業課
北村洋夫氏
東京都神津島　萬作丸　新平丸
神津島村役場産業観光課
東京都　新島　浜庄丸　三郷丸
新島村教育委員会　新島村博物館
前田平太郎氏　植松大氏
東京都八丈島　優宝丸　大福丸
八丈植物公園ビジターセンター
静岡県下田市　（株）伊豆下田フィッシング　第二七島丸　みこもと丸
下田市教育委員会　下田市海上保安部
青森県八戸市　三平丸
岩手県普代村　翔光丸
岩手県大船渡市　幸徳丸
宮城県塩竈市　えびす屋かもめＶ
福島県小名浜市　昇辰丸
北海道根室市　第十一北信丸
日本放送協会
七島新聞社
南海タイムス社

本事業へのご理解とご協力ありがとうございました。

カンムリウミスズメ保護プロジェクト　2012 年事業報告
2013 年 3 月発行
公益財団法人　日本野鳥の会
東京都品川区西五反田 3 丁目 9 番 23 号　丸和ビル
TEL 03-5436-2620　 FAX 03-5436-2635